

●キャラ設定

【苗字 ヒロイン】20代半ば

主人公。区役所職員。責任感が強く、困っている人を放っておけない。

役所に時々やってくる女兒（ゆいちゃん）が足を骨折し、梗生の勤める病院に入院したことがきっかけで、彼と知り合う。

【梨木 梗生（なしき こうせい）】

一人称：僕

年齢：29歳

外見：178cm。全体的に程よく引き締まった体つき

職業：医師（小児科）

趣味：読書、駄菓子屋巡り

性格：マイペースで甘え上手。気に入らない相手に対しては内心上から目線。子供と真面目な人間には優しい

家族構成：父（健在・外科医）、母（病死・主婦）

バックボーン：幼い頃から多忙な父親との関わりはほとんどなく、母親が救急搬送されて息を引き取る前に駆けつけなかった父親を憎んでいる。一人で過ごすことが多く、読書と勉強以外にやることがなかったため、将来の目標が見つからないまま結局医師になる。やがて勤め先の病院と巨大政党との癒着を知り、失望して投げやりになったことで急患の小児を救うことができなかった。そんな自分を、母親を看取らなかった昔の父親の姿と重ね、以来どこか自嘲的になる。

●プロット

[＜攻略前 \(not 恋人\) ＞](#)

本編想定。

ゆいちゃんのお見舞いに来たヒロイン。

廊下で梗生が他の医師と話しているところに遭遇すると声を掛けられ、面倒だったから助かったと言われる。

その後、一緒にゆいちゃんの病室へ。

子どもの患者に優しく接する彼の姿を見て、以前自分はこの仕事に向いていないと言っていたが、実際は尊敬できる医師だと思うヒロインだった。

<攻略後 (恋人) >

後日談想定。

金曜日の夜、梗生の自宅に泊まりにきたヒロイン。

残業で遅くなってしまったヒロインに、少し不機嫌な様子の梗生。

「ぎゅーしてくれたら許す」と甘えられ、言うとおりにする。

梗生は不機嫌なふりをしてヒロインとくっつきたかっただけだったのよう。

そのとき、梗生がヒロインの指に切り傷を見つけ、手当てをしてくれる。

絆創膏の上からキスをする梗生。そんな彼に、ヒロインは愛されていると改めて感じるのだった。

以下、攻略前 (not 恋人) シナリオサンプル

○病院・病棟廊下 (昼)

エレベーターの到着音が鳴り、扉が静かに開く。

【ヒロイン】

(怪我の具合、良くなってるといいな)

足首を骨折したゆいちゃんのお見舞いに通うようになって、2週間。
手術は無事に終わり、先日からリハビリに取り組むようにもなった。

【ヒロイン】

(そろそろ退院できるといいんだけど……)

彼女はしっかりしているとはいえ、まだ11歳だ。
入院生活は心細いだろうし、少しでも元気づけてあげたい。
そう思いながら病室に続く廊下を歩いていると……。

【ヒロイン】

(……あ)

曲がったところで見知った人を見かけて、足が止まった。

【梨木】

「——さすが笹岡先生。この分野において先生の右に出る人はいませんね」

【年配の医師】

「ははは、梨木くんにそう言われると嬉しいね。私も君のことは勉強家だと感心しているよ」

診察時間外なのか、梨木さんが他の医師と立ち話をしていた。
爽やかな笑みを浮かべてはいるものの爪先は外側を向いていて、早くその場を後にしたいというのが伝わってくる。

【ヒロイン】

(声掛けたほうがいいかな)

【梨木】

「……」

【ヒロイン】

「——！」

目が合った瞬間、梨木さんが手を振ってきた。

【梨木】

「苗字さん、こんにちは」

【ヒロイン】

「こ、こんにちは」

【梨木】

「ゆいちゃんのお見舞いに来たんだよね？ 僕も足の調子が気になるから、一緒に行くよ」

「先生、お話ありがとうございました。今度の勉強会、楽しみにしてます」

【年配の医師】

「ああ。終わったら飲みにも行こう」

【梨木】

「ええ、ぜひ」

医師の背中が見えなくなると、梨木さんはふうと息をついた。

【梨木】

「君が来てくれて良かった。あの人、話が長いから」

【ヒロイン】

「あはは……」

【梨木】

「それじゃ、行こうか。ゆいちゃんのところ」

【ヒロイン】

「え？ ……あ、はい！」

【ヒロイン】

(てっきりさっきの状況から抜け出すために言ったんだとばかり……)

少し驚きつつも、彼の後を追って病室へと向かった。

○病院・病室（昼）

【ヒロイン】

「ゆいちゃん、こんにちは」

【ゆい】

「あっ、こんにちはあ。こーせー先生もいるー」

大部屋に入ると、ゆいちゃんはテレビでバラエティ番組を見ている最中だった。その左足は膝から下が包帯で分厚く巻かれ、しっかり固定されている。

【梨木】

「リハビリ頑張ってるんだってね。調子はどう？」

【ゆい】

「動かすと痛い。だからまだ上手に歩けない」

【梨木】

「そうかあ。でもちよつとずつ動かせるようになってきてるから、大丈夫」

「ゆっくり感覚を取り戻してこうね」

【ゆい】

「うん、頑張る！」

【梨木】

「よしよし、いい子だ」

頭を撫でられて、ゆいちゃんが嬉しそうに笑う。

【ヒロイン】

(年の離れた兄妹みたいで、なんだか可愛い)

二人の様子が微笑ましくてほっこりしていると、こちらを振り向いた梨木さんにじっと見つめられた。

【梨木】

「あれ、ひょっとして苗字さんもなでなでしてほしいの？」

【ヒロイン】

「へっ！？ いやいや、違いますよ！」

【ゆい】

「病院ではお静かにー」

【ヒロイン】

「ご、ごめんなさい……」

はっとして両手で口を塞ぐ。

【ヒロイン】

(梨木さんが変なこと言うから……いや、いつものことなんだから慣れないと)

すると、右手に持っていた紙袋に梨木さんが気づいた。

【梨木】

「それ、駅前の本屋の袋だよな」

【ヒロイン】

「そうです。ここに来るときに買ったやつで」

「ゆいちゃん、これ暇なときにでも読んで」

【ゆい】

「わあ、『みらくる魔女キティ』だ！」

手渡した5冊の漫画を受け取ったゆいちゃんが目を輝かせる。
小学生の間で流行っている少女漫画を事前に調べたのだが、これにして正解だったようだ。

【ゆい】

「ありがとう、ヒロインお姉ちゃん」

【ヒロイン】

「どういたしまして。読んだらどんなお話だったか教えてほしいな」

【ゆい】

「うんっ」

【梨木】

「俺からもありがとう。入院中は気晴らしが必要だから、こういう差し入れは凄く助かるよ」

「ゆいちゃん良かったね。暇だ一っつとずっと言ってたもんね」

【ゆい】

「夜にならないと好きな番組やらないんだもん。なのに早く寝なきゃいけないし」

【梨木】

「消灯時間が決まってるからね。確かに退屈かもしれないけど……」

「眠ることでゆいちゃんの足もお休みできるから、大事なことなんだよ」

「だからお昼はリハビリやってお飯もたくさん食べて、夜はぐっすり眠ろうね」

【ゆい】

「はい、こーせー先生」

ゆいちゃんを励ます梨木さんの表情は、さっき廊下で見たものとはまったく違っていた。
混じり気のない、純粋な慈愛のこもった笑み――。

【ヒロイン】

(梨木さん、『自分はこの仕事に向いてない』って言ってたけど……)
(本当は凄くいい先生なんだよね)

患者からもその保護者からも信頼される、梨木先生。
そんな彼を私も尊敬していると言ったら、彼はどんな反応をするのだろうか――。

F I N

以下、攻略後（恋人）シナリオサンプル

○梨木の部屋・リビング（夜）

【ヒロイン】

「ごめんなさい、遅れました……！」

金曜の夜。合鍵でドアを開けて、急いで梗生さんの部屋に駆け込む。
リビングには、ソファに寝そべって唇を尖らせている彼の姿があった。

【梨木】

「遅いー」

【ヒロイン】

「すみません、残業が長引いちゃって……」

【梨木】

「久々のお泊まりだから楽しみにしてたんだよ」

「すごく寂しかったんですけどー」

【ヒロイン】

「うう……許してください」

今夜はこの部屋で一緒に映画を観る予定だった。
けれど今からお風呂に入れば、観賞会を始める頃には深夜になっているだろう。

【ヒロイン】

（梨木さん、明日は朝早くに出なきゃいけないって言ってたし、映画はまた今度になっちゃうな……）

どう埋め合わせしようか考えていると、クッションを抱いた梨木さんがぼつりと呟いた。

【梨木】

「……じゃあ、ぎゅーしてくれたら許してあげる」

【ヒロイン】

「え、ええ？」

まさかの条件に、気の抜けた声を上げてしまう。

【梨木】

「駄目なの？ だったら僕、今夜は一人で寝ちゃおうかなー」

【ヒロイン】

(これは相当拗ねてる……)

恋人なのだから抱き締めることくらい、簡単なはずだ。
けれど未だに自分からするのは慣れなくて、恥ずかしさが捨てきれない。

【ヒロイン】

(といっても遅くなったのは事実だし、せっかくのお泊りだから仲良くしたい……)

意を決した私はソファに近づき、横になったままの彼をそっと抱き締めた。

【梨木】

「！」

【ヒロイン】

「こ、これで……どうでしょうか」

おそるおそる尋ねると、梗生さんは私の背にするりと腕を回して、首元に頬をすり寄せてきた。

【ヒロイン】

「わっ……！」

【梨木】

「ふふ、ヒロインちゃんいい匂い」

【ヒロイン】

(なんか緊張する……)

初めてじゃないのに心臓の動きは早くなるばかりで、それが梗生さんにも伝わっているのではないかと思うとさらにドキドキしてしまう。

これ以上は刺激が強すぎて耐えられないと、思わず彼を引き剥がした。

【ヒロイン】

「あ、あの！ メイク、服に付いちゃいますから。また後で」

【梨木】

「いいよ、このままで」

そう言われ、今度は彼の胸元に引き寄せられる。

一回り大きい体に包み込まれて、次第に緊張が安心感へと変わっていく。

梗生さんの顔を下から覗き込むと、彼は満足げに微笑んでいた。

【ヒロイン】

「……もしかして、ただくっつきたかっただけなんじゃ」

【梨木】

「あらら、バレちゃった？」

舌を出して笑ってみせた彼に、まったく悪気はなさそうだった。

【ヒロイン】

(不機嫌そうにしてたの、お芝居だったんだ……)

(でも、ほっとした)

【ヒロイン】

「もう、梗生さんってば……」

【梨木】

「ごめんごめん。でも寂しかったのは本当だよ。君と過ごせるの楽しみだったから」

「だけどころして会えたから、それで充分。代わりにめいっぱいパワー補充させて？」

【ヒロイン】

「……はいっ」

【ヒロイン】

(本当に優しいな、梨木さんは……)

満たされていくのを全身で感じる。

彼の望み通りパワーを送るべく指を手に絡めようとする、真面目な声が降ってきた。

【梨木】

「……ヒロインちゃん、その怪我どうしたの？」

【ヒロイン】

「え？」

視線の先の繋ぎかけた左手を見てみると、中指に身に覚えのない小さな切り傷があった。

【ヒロイン】

「ああ、多分書類か何かで……痛みがないから気づきませんでした」

【梨木】

「大丈夫？ ちょっと見せて」

【ヒロイン】

「へ、平気ですよ。浅いですから」

【梨木】

「——いいから、見せなさい」

いつもより少し低い声色で囁いて、私の手をとった。

真剣な眼差しで傷口を確認し、すっと立ち上がったかと思うと、すぐに戸棚から救急箱を持ってくる。

【ヒロイン】

「梗生さん……」

【梨木】

「ちょっと待っててね」

手当てしてくれるその手際は、さすがとしか言いようがない。
あっという間に消毒され、絆創膏を皴にならないように綺麗に巻いてくれた。

【ヒロイン】

(……これ、子どもの患者さんたちにあげてる動物のキャラのやつだ)

梗生さんらしいと思いつつ、絆創膏の懐かしい絵柄に心が和む。

【ヒロイン】

「ありがとうございます、梗生さん」

【梨木】

「……さすがに、ずるかったかな」

【ヒロイン】

「え……？」

【梨木】

「今日の僕、子どもみたいだね。ごめん」

「好きだからつい、っていうのは言い訳になっちゃうんだろうけど……」

そう言って、絆創膏の上からキスをする。
宝物を扱うかのような丁寧な仕草に、とくん、と胸が高鳴った。

【梨木】

「ふふ、癒し効果のお薬。早く治りますように」

【ヒロイン】

(……一番効く薬、貰っちゃった)

再び腕の中に閉じ込められ、逞しい胸元に身を委ねながら、彼に愛されている幸せを噛みしめる。

口づけされた指先が、ほんのり温かくなっていくのを感じた。

F I N